

2025(令和7)年8月8日(金)～10日(日)

サマーフォーラムinきょうと

2025年9月発行

第14号

速報

第58回全国手話通訳問題研究集会

～平和と人権はいのち 仲間と共に京都から～

KYOTO TERRSA 京都テルサ

〒601-8047

京都府京都市南区東九条下殿田町70



<事務局>「第58回全通研～サマーフォーラムinきょうと～」実行委員会
〒610-0121 城陽市寺田林ノ口11番64
京都府聴覚言語障害センター気付
E-mail summerkyoto2025@kyoto-chogen.or.jp

各講座の概要・様子

C講座(人権・福祉)

4人の講師から、日本で生活する外国人の現状、障害と女性の2つの差別、LGBTQ、旧優生保護法の実態と、現代の日本にある多様性と人権に関わる課題の提起がありました。参加者からは「(外国人への)医療通訳の話を手話通訳と比べて、共通点に共感しつつ、専門性が高いのに身分保障が不十分、職能集団が形成されていないと聞き、全通研や士協会の存在意義を改めて実感した」「(優生保護法問題について)声をあげられていない人の掘り起こしがこれからの課題と思います。聴覚障害者以外の被害者のことを聞き、改めて怒り、悲しみがこみ上げてきました」「異なる分野の専門家から、さまざまな課題を一度に学べる機会を作って、参加者が幅広く学べるようによく考えられていた講座だったと思います。力を尽くしてくださった実行委員の皆様には感謝いたします」などの声が寄せられました。

D講座の様子



D講座(地域づくり)

京都で在日コリアンが最も多く住む地域・東九条で、さまざまな立場で差別を受けてきた人と共に暮らす街がめざす「ひろば(朝鮮半島のことばでマダン)」づくりの歩み、赤ちゃんからお年寄りまで、誰もが認められる場所づくりに取り組むNPOと、そのNPO設立当初から一緒に豊かに暮らすことができる地域づくりに参画してきた設計事務所による講義と、研究者のお二人からの、社会福祉の視点から見た暮らしの課題、自然災害時に要配慮者が向き合う課題に関わる講義がありました。

参加者からは「さまざまな立場で地域と関わり、地域住民と共に取り組み、制度がなければ自分たちで作るという姿勢や取り組みは、私たちが長年行っているろうあ運動に通じると感じました」などの声が寄せられました。

C講座の様子





A講座北コースの様子



A講座南コースの様子

A講座(体験学習)

北コースと南コースに分かれて、ろう教育発祥の地・京都にある、きこえない人とゆかりのある施設などを回って、歴史について学びました。

北コースは、全国初のろう重複障害施設として幅広い事業を展開してきた「いこいの村聴覚言語障害センター(綾部市)」へ。利用者の声を聞き、穏やかな表情で暮らす姿を見て、手話があり、仲間がいる暮らしの意義や大切さを改めて学びました。帰途、舞鶴港とれとれセンターでの買い物も楽しみました。

南コースは、全国手話研修センターと京都府立聾学校を見学。研修センターでは、全国の手話の拠点施設として担う事業について聴講し、ボランティアグループ「手話メイト」の案内で嵯峨・嵐山を散策しながら、「嵐山」「天龍寺」「緑」など、京都の手話表現も学びました。全国初の聾学校である府立聾学校では聴講と、同校で教鞭をとってきた代々の先生たちが、日々の教育実践の積み重ねとして残してきた貴重な資料の見学をしました。

B講座(入門)

連盟の石橋大吾理事長の講義では、ひまわりの写真に込めた思いから手話施策推進法についてまで、幅広く話が繰り広げられ、参加者からは「真の共生社会をつくるために、自分にできることは何かを考え、進めていきたい」との声が寄せられました。

全通研の宮澤典子副会長の講義では、全通研の50年の歩みと、今後どのように活動していくのかが語られました。参加者からは「さまざまな人とコミュニケーションをとって運動をしていくことの意味がよく分かった」「経験は何よりも強い知識になる！という言葉が印象的。これからはいろんな経験をしていきたい」との声が寄せられました。

京都府内の元&現自治体手話通訳者によるパネルディスカッションには、参加者から「パネラーのような設置通訳者になりたいと感じました。相談援助技術を持ち合わせ、掘り起こし、引き出し、ろう者とともに考える、そんな未来像を描きました」との声が寄せられました。

全通研研究誌担当による講義では、研究誌の連載企画「手話この魅力あることば」のねらい・編集の経過を聴いた後、研究誌第152号に載った宮下富美子さん(京都府京丹後市)の映像を参加者と一緒に視聴。参加者からは「心が揺さぶられた」との声が寄せられました。



B講座の様子

